子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑥

水沼昭子

「おはよう、せんせい……」子供達はそのときどきの喜びや発見、そして幼ない悩みをいっぱいもって毎朝登園してくる。ある時は、季節を告げる道端の小花だったり、たあいない、しかしその子にとっては宝物の石だったり、虫や小鳥の落した羽根、ほっぺたの涙だったり、さまざまである。そうした物や事柄を私達は「おはよう」のあいさつと共に、しっかりと受けとめようとする。

六月も終ろうとしているある日、ほとんどの子供が登園し、自分の遊びをみつけようとしたり、自分の今日の〝場〟をさがす朝の、なんとなく動きの多いひととき、年長組のY子を囲んで数人の子供達が私のところへやってきた。Y子の手には小さなボール箱が大事そうに抱えられている。そのうしろから担任のA先生が少し困った表情で「先生、お話があるんですけど……」とついてきた。

「Yちゃん何かご用?」と迎えた私の前に、Y子は大事そうに小箱を差し出した。受けとろうとして私は〝ドキリ〟とした。なんと、細いけれど、たしかにとぐろを巻いた蛇が入っているではないか。保育者として落第だとお叱りを受けるかもしれないが本当に〝ドキリ〟とした。しかし、何気なく(――と心掛けながら)Y子の気持を受けとめようと話を聞いてみた。「あのね、ミィから借りて来たの。ミィって、ホラ、うちの小さい猫。まえに、せんせいに話をした、あのミィ。今日の朝、蛇つかまえて来たの。そしてふざけてたら蛇、死んじゃったんだよ。だから借りて来たの。ミィに―」「おうちへ帰ったら返すんだ、ミィと約束して来たの」一息に話すとY子は終りにこう言った。「ミィはこの蛇を食べちゃうよ、きっと」――私の心の中は咄嗟のことに混乱した。A先生の困った表情が私の思いに重なった。「A先生も、水

沼先生もどうしたんだろう、いつもとすこし違う……」Y子の表情は、〃何か困った事を自分はしているのかナ〃と私へ問いかけている様だ。Y子を取り巻いた子供達は「すごい！」「うごくの？」「かっこいい」「いやだー」と口々にいいながら、いかにも興味深げに見守っている。

ふと前日、Y子と昼食をしながらのおしゃべりを思い出した。今、Y子にとって、小猫のミィの繰広げる世界が一番の関心事のようだ。「せんせ、きのうネ、ミィがことりをつかまえてきたの。いたずらして食べそうになったらパパがネ、コラっておこって、ことりにがしたんだ——」Y子の昨日の話題を思い出して私はY子に話をした。「きのう、小鳥を逃がしてあげたのに、蛇は逃してあげないの？」Y子は当然といった表情になった。「だって、ミィはすごくたいへんだったよ。へびがあっちこっち、いっぱいうごくから。ミィはがんばったんだよ」答えながら〃どうして先生わかんないの〃といいたげなY子。そうしたY子を受けとめてやれない私の表情も、きっと、その場に居合せた子供達にとって〃いつもの先生と違うぞ〃と映っているに違いない。小さいY子の手にある小箱。そして、とぐろを巻いた小さな蛇。困った表情の私——そこだけが真空状態の様な朝のひとときであった。

「死んじゃった蛇は逃げられないから、かわいそう。こんな箱の中いやだって思っても動けないし、みんなに見られるのいやって、逃げられないから、おもちゃみたいに持って歩くのは困るナ、先生、あずかっていい？」精一杯の私の提案に「帰りに返してね。ミィに約束したんだから……」納得しかねるといった表情でY子は私に小箱を渡した。

この日の出来事から保育者としての私に重い問いが残されている。Y子の気持をわかってやろうとしたのか。死んだへびなんかもって来て—と云う思いはなかったのか。小猫が食べるなんて—。……たしかにY子はユニークな面を持つ子だ。反面ごくあたり前の事柄に無関心な面があって教師会でも話し合われる子ではある。けれど〃Y子らしい出来事〃で終ってはいけない〃問〃を私の心に残した。〃死んだ蛇を神様にお返ししましょう〃などとの安易な解決をしようとは思わなかったが——。数日後「せんせい、へびきらいなんだね、だって、あんなにおこったもの……」Y子のこの言葉に心を刺された。何気なくふるまっていたつもり、おだやかにしていたつもり…そうした表面の私ではなく、内面の私の混乱を、気持を敏感に受けとめている子供の心の眼に、改めて保育者としての私が問われたと思った。

自分が広げて迎え入れようとしている両手の、広さがいかに自己満足なものであったかを思った。あの時、どうすれば良かったのか……を毎日の子供との生活の中で問いつづけたいと思った。

（千葉・愛隣幼稚園）